



大桑の歴史を訪ねて

遠い昔、加賀の国、犀川西岸の台地の麓、貝殻淵と呼ばれた地に高さが数十丈を超える桑の老木があった。幹や枝が大いに茂り、三千坪に広がっていたといわれる。この地は大桑村と名づけられ、東は医王山に接し、西は布市村と隣接していた。泰澄大師がこの地に社を建て、守護神を祀った。

花山天皇の頃、帝の行幸に際し飯の御所がこの地に置かれた。これに因む御所ヶ谷は布市村に通じる切り通しで、御参詣坂の由来でもある。

この後、富樫氏の一族、大桑三郎利光の居城であった。

この村に多くの寺があったが、善福寺、徳善寺、光誓寺などは大桑郷から移転した。明治四年の犀川大洪水の際、桑の根の一部が水中より現れた。翌年に藩士の中山守成が掘り取った。これを後に石川県勸業博物館に移し、同館にて保管した

明治三十五年一月

日吉社



松田権六 15才頃の模写絵 撮影：千田 正 ©2007 金沢市発達公民館